

## 認知症 知るという努力

山南中学校 三年 若林 ゆるる

先日祖父が入院した。階段から転落した際急性硬膜血腫に。三年前に前頭側頭型認知症と診断されていたこともあり、胃ろうという形がとられた。突然の出来事だった。いや、ずっと前から予兆があったようにも感じる。「認知症」それは聞いたことはある言葉。でも祖父がその対象になるなんて思わなかった。

九月。祖父の事を機に、地区の公民館で行われた「厚生労働省の「認知症を知り地域をつくる」キャンペーン認知症サポートキャラバン」に参加した。「認知症は大きく四つに分類されるそうだ。疾患部位が脳の前頭葉、側頭葉、海馬である脳血管認知症。脳出血や脳梗塞が原因でまだら状の症状になる。頭頂葉側頭葉でおこるアルツハイマー型認知症（AD）。脳の細胞がゆっくりと死んでいき脳が萎縮する。後頭葉でのレビー小体型認知症。幻視、パーキンソン症状、睡眠障害など様々な症状を引き起こす。そして前頭葉、側頭葉で発症する前頭葉側頭葉型認知症。そう、祖父の型だ。脳の司令塔である前頭葉が破壊されるため我慢、社会性、思いやりが失われる。」祖父はどうだっただろう。私に対して冷たかったっけ？少し考えてみたもののわからない。

「認知症にはBPSD行動心理症状というものがある」そうだ。「幻覚、妄想、不安焦燥、抑鬱、徘徊、心気といった重度な行動をおこす。しかし、これらの症状は介護者の感じる負担やストレスが不適切な行動へ繋がることで悪化する…」

認知症という病気について学ぶために行った講演。それが介護者側の行動の在り方を改めて見直すきっかけとなった。

その中でも特に印象に残ったのは「できないからやらせない ではなく一緒にやる」という言葉だった。認知症と診断される以前、最初は教えていたスマホの使い方も、次第に高頻度で聞かれるようになり強くあたってしまったことがある。「何でできひんの？」そして「じゃあせんでいいから。」そう制止した。介護者側の与える不適切な行動というのはまさにこれのことなんじゃないのか。

思い返せば、祖父は認知症だと診断されてからも穏やかなままだ。

何故そんなことを言ってしまったんだろう。祖父はどう思った？どう感じた？そう言われても笑顔でいたその表情の裏に隠れていたのは悲しみだろうか。

祖父は散歩が好きだった。朝夕かかさず神社に行く、それが日課だった。ある朝いつものように神社にでかけたが昼を過ぎても帰ってこず、家族や近所の方総出で探しても見つからなかった。警察に搜索願を出したところ溝に落ちて動けなくなっているのを発見された。夜に八キロ程離れた地区まで私の自転車で行ったり、真冬に裸足で出かけたこともあった。時間や服装を考慮出来なくなっ

ていたのだろう。GPSを頼りに祖父を探す毎日が繰り返された。それからというものの、家族と共に祖父の行動を止める事が多くなっていった。祖父を思うつもりが楽しみを奪ってしまっていたことに気がついた。行動を止めるのではなく一緒に行ってあげる、その方が祖父も嬉しい選択だと思う。

自由を制限するのではなく、本人がしたいことを尊重すること。それが大事なのだと強く実感した。

では認知症の方の“人権”は本当に守られているといえるのだろうか。人権の話をする際、いじめ問題や戦争の話、そういったテーマにスポットがあてられがち。私にはそんな印象がある。しかし悪意からくるものだけが人権侵害なのか。認知症にも共通していえることだと考えた。善意のつもりだったものも実は相手にとっては違った、ということもあるのだろう。

認知症の方の『人が人として生きられる権利』『自由に楽しみを味わうことができる権利』『人権』を守るために私にできる行動。過去の人権教育事業から「無知が差別を生む」この言葉を胸にきざんでいる私に今できる行動それは『知る』こと。認知症について知る・介護者の在り方について知る・相手を知る。知ることを通じて正しい考えを得る。

私が入権問題について向き合う度に幾度も考えさせられたことも『知ることの大切さ』だ。

私はやめない。知る努力を。